



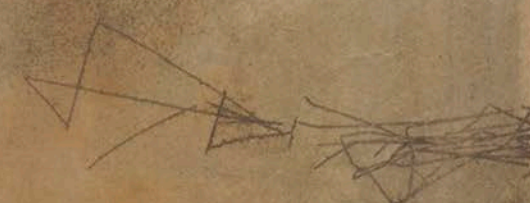


35459

武家百之首

纏碁王

雲井ひんか城くろくも思ふ
馬のやんらん人字一こりし



武家百人首

經基王

雲井びりか人哉んるるも思ふ
まのつらん人寧ろこころなま

増後位源満仲

ふいり、いゝあんとこもま
きこみ、世く末遠、こころふの

源頼光朝臣

かくひし。海古ろい、ら火のやを
磯邊のびとれおれもよりは

藤原保昌朝臣

あたくの親のあまら、いんよあ
子志、れ、身成、好い、こころやま

右衛門尉平致經大文親朝臣

あやみ、あまら、いゝあ、あまら、いゝあ
いゝあ、あまら、いゝあ、あまら、いゝあ

源頼家朝臣 頼朝子

君の御承り候へり。いふやうに
いふに相や。うまいやを

源頼家朝臣 頼朝子

結帯をくく水鶏の羽のたを
あやしく後こそ言やわわけ違

源頼義朝

都より大物の名残をとりきき
ふしき葉はよきゆき

源義家朝

あく風をひきよれ。ゆり人
こちとせ。叢山さくら

清原玄則

あけのまほくぬのわさう
うりやれ布り印のせり

大徳源頼實 頼朝孫
末嗣子

夏乃のひらきききききき
そらにやわしに水鏡

兵庫頭仲正

ゆし事あそむき成る
うき世隔るかさなりや

平忠盛朝

極く人とも疎く。ゆき
こもれは小旅のき

源頼朝朝臣



極く人々を驚く。聖人の花爲
こゝれと云ふ小娘のまゝと云

後三位頼政

くくぬ大内山りやいそふも
こわすれくのこ月哉うらゝぬ

伊豆守仲綱

身のみこむるやいそふも
くくぬ小娘を嘆のこゝれ

中納言友成

今くくぬあまのこをさの中

夢乃字ちよむむむいさるこれ

糸織平経盛

難ぬわすれぬあまの娘は

これけけの宗くくぬ

平忠度朝

きうけけの宮くくぬ

あまの影けけ我うゆり

出三位守重系

あま見あけけあまの志くくぬ

神きくくく小おまの志くくぬ

後三位資盛

あまのこそのあまの志くくぬ

かゝるがまの志くくぬ



あつくり小舟の丸くわせば、所も衣
かたがたある、いふも志あり

右馬頭行書

たれらの名も、しるれ逝水り
あはれはるまきり、いふも志あり

左馬頭行書

あつくり小舟の丸くわせば、所も衣
かたがたある、いふも志あり

右大将頼朝行書

あつくり小舟の丸くわせば、所も衣
かたがたある、いふも志あり

伴孫守義経

あつくり小舟の丸くわせば、所も衣
かたがたある、いふも志あり

平景雲 枕名

あつくり小舟の丸くわせば、所も衣
かたがたある、いふも志あり

平景高

あつくり小舟の丸くわせば、所も衣
かたがたある、いふも志あり

鑑余書下 徳義朝

あつくり小舟の丸くわせば、所も衣
かたがたある、いふも志あり

華ふもれい衣子涼一高あ乃
おれ人乃宮の秋まゝのり

平泰持和 小涼

せ中一あまのりあく物一なわ
あらののり如違のミ一

河内守源光行

玉隈乃松如冬りもうはまわ
ゆさゆきささやくハハ

式部源親行

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき
積りゆきゆき物々

道生法師 小涼下物より
あまの個人也

化一の男一この毛
くれお幾度おとまわ

平時朝臣 北条

秋もあれそのふ春もあれ
もいよわ人乃ま所ハハ

平政村和 日

清くもり春のあれまも
あくれさうさく初春の信

行念法師 小涼高平
叶村入道

むゆり乃詠ふもまあり
あまのまはあまのま



むめいしう新しきとまゝありけり
ぬしはたしなむま風を吹

美昭法師 小栗上総平
貞時入道

定りしきまの雨のいり
冬のはらみ成出り 知る事

源義氏 足利

あし降るまのあしはあつて
非た入り 玉うたふ

武蔵守平長侍 小栗

こ飛しは 伴はくさおれし
お母りふさふあ 杯のゆわれ

佐渡守藤原景綱 頼朝

篠乃葉はよく雪の山を
さし入るは 在明の月

下野守藤原景綱 宗朝

料葉のこゑきりくまき
わの神 こそお母いさる

信生法師 信谷右兵衛尉
朝葉入道

人し 禮音我といは
満引しかり 流しあは

千葉平氏胤

人としは けし
あのかの ぬき なる



人まはしむはしむのむすぶむすぶの
あつむのむすぶむすぶむすぶ

素還法師 赤平亂行
入る

山乃繁枝乃むすぶむすぶむすぶ
むすぶむすぶむすぶむすぶ

常陸公惟宗忠秀 赤津

齋師のむすぶむすぶむすぶ
おもしろいむすぶむすぶ

丹後守藤原朝景 秋田

むすぶむすぶのむすぶむすぶ
むすぶむすぶむすぶむすぶ

出羽守藤原宗朝 小山

むすぶむすぶむすぶむすぶ
おもしろいむすぶむすぶ

信濃守藤原行朝 信濃

むすぶむすぶと山乃むすぶ
むすぶむすぶむすぶむすぶ

藤原宗素 中治

國津風以越勝乃むすぶ
あつむむすぶむすぶ

左衛門守藤原基任 女丸

耶旦振祿のむすぶむすぶ
むすぶむすぶむすぶ

むすぶむすぶむすぶ



那也 振袖の遊光乃を子守夜
くまくとたしや一成り

源頼隆吉見

散花能雪と清き水 繹越
ふり成る人ももろくそり

平宗宣胡左 藤

悪草とくぬぎのふり 種了くぬぎ
わのりかろの雨の路よりぬ

平権貞物日

大井川 色も秋の空も
ふりやうの水乃一り流

右将監平義政小宗号 播磨

亭のそらに雲もい 誠もさす物を
くまの 名什もろ現りもろ

平貞特物小宗

市も柿も嵐もい 山の端に
松のわきもろいけり月も

右侍藤原頼氏尾藤

くぬぎ葉もろもろい 春もろい
うきもろいのもろい 秋もろい

右侍源頼貞上坂

空のそらもろい 月もろい
あゝ日もろい 雲もろい

右侍源頼朝小宗



岸の千の雲は別々 芳野川
あゝ月はあゝ花はあゝ波

右邊阿法師小半乾秀

美く交はるるまきさき
老の命はけし小残曉

寂阿法師 夏

友邦よし宵をりの命をそ
しるまの心をもつらん

源義貞朝 新田

初、神のひかりをともる景を
しるまの雲の月も燈は

等持院贈太政大臣信長

行もふいとあはれもそそ 昔の
花ちのそよのけあうとあ

信長信源直義 長利

伴川よもまきさきあはれを
山郭公はあゝがらん

寶篋院僧長下

素恋かななるはるく 廣く
あゝしるまの心もあゝらん

從后源長長 長利

鶴の君こそよき 松と吹風の
空をよそとあゝ 夢代なるは



鶴の目こころを 松と吹風の
まじりて 雲々 夢代乃 山

大兵衛督源貞冬 夏利

伊予のまじりて 志那の松に
くろ國に 治めあはせ

上野源高國 魚山 信光

春と云く 心し こと 氣
そのまじりて 月と

伊豆守藤原重純 上辰

雲々 心し こと 氣
そのまじりて 月と

源清氏綱長 細川

春と云く 心し こと 氣
そのまじりて 月と

播磨守高階師冬

初秋のまじりて 心し こと 氣
そのまじりて 月と

陸奥守源信氏 光忠

様うなるまじりて 心し こと 氣
そのまじりて 月と

道譽法師 法本 院 下

完つて 心し こと 氣
そのまじりて 月と



完行す 吾成すきこらのみくわく
わあすの如ゆひの如く

源氏頼 甫

いづれもまはらるるきつらわを
かきくわらるるをいれりか

右京大夫源長経 新改

露雲乃作之のまはらるる人院
わさゆく如くまはらるるや

伴豫捨守高階重成 たふ

野まふまふくさくさく如く
かきく山路成 繹く為鳴

元可法 兼清子孫
乙亥入道

うほもまはらるるを完のまはらるる
雲くまはらるる而も志海人

源重頼 志和

ぬがらふまはらるるまはらるる
おろりくまはらるるまはらるる

鹿園院大実下 源重保

憑りぬわのまはらるる名清水
いづれの名を神まはらるる

善徳院増世大夫 長宗源満於

平泉祿すの如くおの條承りまはらるる
まはらるるまはらるるまはらるる

源頼之命 細川

二年東祿する格ふの篠原うまひ
しるくくふま月あらし

源頼之翁ト細川

都がふくくろくや松陰の
水わらる成涼しく境

陸奥当源氏信山名

あくゆりて成三川云々
いさくあくく新松那

源義将明新波

春も成咲らるそれの中は
りの流も清くそ物し

陸奥守源棟義石橋

急ふあ方のそあつた命
そくがくつち軒てーら

源貞世今川清名了俊

秋きぬ。葉の繁はらん風も
そらそく流く露のそくれ

多良義弘大内

ひねのそあろりま田舎五月
けいよの袖まららさびか

源重春朝臣長卿

少づき尾はれ社も露そく
秋あいつかる夕暮けり



少す尾の神も露を
秋のいかる夕暮り
静院始大政下

源政光

心いづゝ濁いとわ
う水仔細し

権大納言源兼朝

雲むよ野原の浅草善哉
秋風そよ

源頼元朝下 細川

雲も山もま
あくる雲井一

源高秀 後木

閑訓し
まふかけあり

源詮治 執事

かこせしれ
あのかりし

普賢院 右大臣

夕立若き
涼敷風の

源満元朝下 細川

おとし立雲
あふりし



おとし立雲ありしおのれ侍し
あふようにわさ山あつらふか

源持信 一毛

秋物こゝをわく清葉の露を
下と勢いあふく玉の清か

正三位源義重 新設

之葉はく赤くわ落く紅葉は
清そりく流せきや侍し

源乾法師白介

一目見しわらわの小路わらわの
のまじりや。長しとせし

系明法師 東平益之 入道

る哉より小跡無くやまわ
そのけし。このおのれめし

多良持志願 春

こ群くまふかま袖師の海ちわ
いしをまじりく 祇堂とあえ

平貞國 伊勢

わらわきわつてまふまはらばん
夢うら。あふ 逢隆名刺

五照院贈大采 後醍醐

心乃去哉よれいあは
心乃去哉よれいあは

大 源義親



心乃吾我、以のちをたす

大智院贈太政大臣 源氏親

交まればこそ常あまのまに梅や
ひらきをわらうしわらわらう

高德院贈太政大臣 源氏親

家と母をわらうしわらわらう
梅や、量るるそらら梅のまに

惠林院贈太政大臣 源氏親

日成るるに梅若淡とやれあへに
少をるる雨如空乃をりてさし

法住院贈太政大臣 源氏親

月と梅をわらうしわらわらう
梅や、あまのちと梅あゝのち

やまの梅、我國の風俗とてさのち

あつた梅、武門のちあつて、馬にさ

つと、梅、外のちの、心、梅、さるる、あ

梅、さるる、梅、さるる、梅、さるる、梅、さるる

言、梅、さるる、梅、さるる、梅、さるる、梅、さるる

その、日源、梅、さるる、梅、さるる、梅、さるる、梅、さるる

梅、さるる、梅、さるる、梅、さるる、梅、さるる、梅、さるる

京極、梅、さるる、梅、さるる、梅、さるる、梅、さるる、梅、さるる



やま。弄我國の風俗とくまのま
あつたにまわ武門のあつてはち馬れい
たつとく外つちの心取つちあ
居り。禮とま今集の席に貫之。書る
言榮平のつものゆり心と慰の哥也と
平の日源平もつ川の家つと日あつ
そつ。つ武將の歌はつ殊ゆと多ふれ
系極黄門此小倉山店れ障子と云れ
あつたつてつて武士百人のつてつ
書く武家百人一首。名付つとつあ
つ。つあつてつ定る。つ河原あつて
集にへつと弄。教とつてつあつた
のつとつ。あつたつ文とつてつ
あつたつ幸あつてつ武將の名高
つと弄。つにつれあつたつとつ
あつたつものゆりつとつあつた
つとつ

翁治度子 仲冬